

Title	堀江保蔵編 海事経済史研究
Sub Title	
Author	栗本, 慎一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.4 (1967. 4) ,p.461(111)-
JaLC DOI	10.14991/001.19670401-0111
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670401-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ド教授でもあり、貨幣経済理論、経済理論史、経済思想史、労働経済学等の講義を行ってきており、彼の主張はフランス・ソシオロジスムにつらなるものであり、この書物においても、余りにも一面的であるとか、あるいはセクト的であるとか、というようなものではなく、一応どこからでも、「経済思想史」、広い意味での、「経済学」を研究し、あるいは前後の諸関係を固くすることなしに見直してみる、という気持にさせる。

著者はこの書物を六篇に分け、その第一篇を、一般的体系化のすぐれた試み以前の経済思想——一七五〇年以前、として、その第一章を古代思想、第二章、中世、第三章、重商主義、第四章を、自然法に対する信念、とし、第二篇を、古典主義学派、とし、その第一章、フイジオクラシー、第二章、アダム・スミス、第三章、イギリス古典主義者、第四章、古典学派のフランスの支流、第五章、古典主義諸学派の評価、とし、第三篇は、古典主義諸学派に対する最初の反動として、その第一章、シスモンディ、第二章、価値理論および分配論に関する若干の新しい説明、第三章、資本主義の最初の批判、「空想的」社会主義、第四章、歴史学派とその追従者、第

五章、経済「恐慌」に関する最初の論議、第六章、スチュアート・ミル、第七章、カール・マルクス、として、第四篇には、新古典主義諸学派、について述べ、その第一章、先駆者、第二章、「新古典主義」の開拓者、第三章、新旧古典主義理論の調和の試み。アルフレッド・マーシャル、第四章、アメリカの限界主義学派、第五章、限界主義学派、第六章、L・ワルラスの後継者、第七章、新古典主義者と社会問題、として、次の第五篇には、新古典主義をこえて（一九〇〇—一九三〇年）、とし、その緒論には、T・ヴェブレン、O・シュパン、F・シミアンについて述べており、第一章、マルクス主義の発展、第二章、貨幣的均衡にかんする諸研究、第三章、競争の分析、第四章、均衡への障害とそのおこらうべき欠陥、第五章、自由主義の反撃、について述べ、最後の第六篇には、成長と停滞、として、その第一章、ケインズの思想、第二章、資本主義と共産主義の運命、第三章、新しい分析の諸方法、第四章、短期動学の推蔽のもるもの試み、第五章、成長の理論、第六章、経済単位の行動、と結んである。

このように全体を通してみると、著者は様

々の角度から、経済思想の流れを観察し、分析しており、その緒論でも述べておるが、経済学研究においては、理論と教義は密接に結びついており、それらの観察の整理、体系化、価値判断および改革の提案等は区別することができぬほどからみあっており、経済科学を「理論」の研究に局限することの誤りを指摘している。また、経済科学を狭く限定してはならない、という彼の考え方は、経済行為の動機と目的の多様性、組織形態の多様性、いわゆる経済外的な変化が経済におよぼす影響を考えてみなければならぬ、といひ、これら様々の動機、経済構造の核心をなすものは人間であり、経済科学を研究するにおよんで、人間諸科学との間に有機的な生きた絆がなければならぬ、と結んでいる。（岩波書店・B6・上・昭和四〇年十月刊・七〇〇円・下・昭和四二年一月刊・五〇〇円・上下・六三一頁・索引・一八頁）

—原田敏彦—

堀江保蔵編

『海事経済史研究』

本書は、海運、造船、港湾、貿易などを軸にした海事に関する経済史の研究であり、日本経済史、東洋経済史、西洋経済史をテーマ別に断片的に編纂した興味ある試みである。そして同時に、堀江保蔵教授の還暦記念論文集ともなっている。

全部で九つの論文が納められている。

- I 明治十年代の海運業（堀江保蔵）
- II 北前船の近代化とその背景（関順也）
- III 日本における近代港湾の生成（佐々木誠治）
- IV 日本近代造船業の展開（井上洋一郎）
- V 北洋漁業の近代化における企業と政党の関係—日ソ漁業交渉と島徳事件—（三島康雄）
- VI 李朝時代の海運業—その実態と日本海運業の侵入—（安乗玲）
- VII 西印度商船とセビリヤ貴族（木田和男）
- VIII 重商主義とイギリス造船業の発展（角山栄）
- IX ビクトリア中期の自由貿易運動—「自由貿易の帝国主義」論に対する覚書—（佐藤明）

新刊紹介

プロトチしているのがV章である。

VI章は、朝鮮の開港（一八七六年）前の租税舟運や不定期海運業に、やがて日本資本の侵入がある過程を分析しているユニークな研究である。

VII章は、十六世紀終り頃までのスペインのセビリヤにおけるセビリヤ貴族の海洋貿易に関する投資活動について述べている。スペインの新大陸貿易史である。

VIII章は、一六六〇年のイギリスの航海法の背景及び成果を分析し、それが「巨大集中マニュ」としての海軍造船所の発展や、ニューイングランド植民地の造船業の発展を含むイギリス海運業・造船業にいかんを発達を促進したかという問題である。

IX章は、これまでの論文とやや視角を変えてビクトリア王朝時代の自由貿易運動の思想的内容をめめた性格規定である。

全体に土着の資料の駆使から議論が展開され、海事経済史研究という視角が新鮮な、また特に全般にも言えることながら北前船や朝鮮の海運などすぐれて且つ非常に意義と興味の深い研究であると思われる。（海文堂・昭和四二年一月刊・A5・二六一頁・一二〇〇円）

—栗本慎一郎—